

もと兩岸の堤防に櫓の木を植え、ロウの原料としてその実を取ったもので、晩秋のころは尻無川の櫓として風流を楽しむ見物客でにぎわった。

「摂津名所図会大成」には、河の両堤は数町の間、黄櫓の並樹にして、紅葉の頃は水に映じ“から紅ひに水くくる”と詠じたる龍田の川も及ばざる光景なりと書かれている。泉尾中堀にかかる紅葉橋に、その風情をとどめていたが、これも埋め立てられ廃橋となった。

昔は、川幅十間(18m) 足らずで水深も深く、船の航行に不便であったので、大正3年から5年までの3カ年継続工事で改修工事を行い、新櫓橋から下流の川幅を三十六間(65.4m)に広げ川底を浚渫、さらに大正9年12月、岩崎運河を開削して、道頓堀川と直結させた。この工事のとき櫓橋が撤去されて新櫓橋が架けられ、北泉尾の堤防にあった民家は立ち退きとなり、岩崎橋付近の岩崎墓地と、紅葉橋付近の泉尾墓地は阿倍野へ移された。岩崎運河が開削されたあとの尻無川は、船の出入りが増えて一時は木津川を上回った。戦後、河口付近は内港化工事で様相を一変した。

